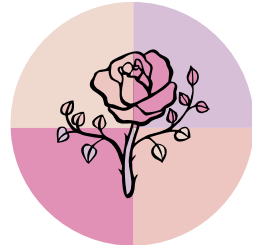


「音楽の都」ウィーンの生い立ち



「ウィーンは音楽の都」とよく言われますが、そもそもどうして音楽の盛んな街になったのでしょうか。その歴史を少し覗いてみましょう♪

【バーベンベルク家とハプスブルク家】

ハプスブルク家が台頭する前、10世紀後半から270年の間オーストリアを支配していたのはバーベンベルク家だった。同家は音楽の振興を政策の一つとしていた。主に政略結婚で勢力を拡大していたため、音楽によって平和が維持されることは政策として有効であり、同時に平和が音楽の発展にも良い条件となった。12世紀半ばに国防上重要である東方の辺境地ウィーンに居を構えたことが、以後この地が発展するきっかけとなる。こののちハプスブルク家はバーベンベルク家に倣って音楽振興政策を継承し、政略結婚によって領土を広げ、13世紀後半から700年近くオーストリアに君臨した。

【地理的状況とさまざまな人種】

オーストリアはドイツやイタリア、ハンガリー、ボヘミアなどと国境を接しており、それぞれの国から高度な文化や音楽がもたらされた。また東方からやってきたジプシーたちやウィーン包囲の際のトルコ軍も、それぞれ文化や音楽を残していった。こうしたものを受け入れ発展させたのは、音楽を好む諸民族で構成されたオーストリアの人々だ。その主体となっているのは、6世紀の終わり頃に移住してきたバイエルン民族。バイエルン地方は音楽が盛んで、南ドイツのさまざまな民謡や民族舞踊の多くを生み出している。その後移住してきたフランク族は古くから詩歌の才能など豊かな想像力を持つといわれ、マジヤール人（ハンガリー）やボヘミア人も民族音楽が多彩な国の出身。こうしたさまざまな人々が音楽を愛し、育てていったといえる。

【音楽の発展】

15世紀後半皇帝マクシミリアン1世の時代、ブルゴーニュやフランドルもハプスブルク家の領土となった。これによりハインリヒ・イザーク、ジョスカン・デ・プレは皇帝に招かれて作曲をしている。また1498年にはウィーンに合唱隊を含む宮廷楽団が設立された。このうち少年たちの合唱隊は、現在のウィーン少年合唱団の源となる。宮廷楽団には貴族の若い音楽家たちや皇帝一族のメンバーも参加し、ときには皇帝自身も自ら指揮や演奏をした。このため、貴族のみならず一般市民も音楽に強い関心を持つようになった。やがて一般市民たちもオペラを楽しみたいという欲求が高まり、1761年一般市民のためのオペラ劇場が建てられた。これが現在のウィーン国立歌劇場の前身といわれている。こうした街で、ハイドンやモーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトといった作曲家たちが活躍していった。

【もっと詳しく知りたい方に…】

『ウィーン音楽文化史 上・下』渡辺護 音楽之友社 請求記号：6.52-W29-1,2

『ウィーンっ子によるウィーン音楽案内』F.エンドラー 音楽之友社 請求記号：6.52-En24-2003

『ウィーン作曲家めぐり』長嶋喜一郎 アートユニオン 請求記号：6.52-N131-2004

最近受け入れた新刊・新譜から、おすすめの資料をご紹介します♪



【音源資料】

『ラヴェル／ルクー：ヴァイオリン・ソナタ集』イブラギモヴァ(Vn)、ティベルギアン(Pf)

請求記号：4G6.42

現在イギリスを中心に活躍しているロシア出身のヴァイオリニスト、アリーナ・イブラギモヴァ。若くして亡くなったベルギーの作曲家ギョーム・ルクーのソナタと、ラヴェルのソナタ等を演奏している。特に、フランクに師事したというルクーの音楽は美しくドラマティック。イブラギモヴァの知性と情熱を併せ持った演奏が胸を打つ。

同じく新譜の請求記号：3H7.17-18にはバッハの無伴奏ヴァイオリン・ソナタ、パルティータの全曲が収録されている。澄んだ音色が心地よいこの録音も、併せてどうぞ。

『ハイドン：ロンドン・セット』ミンコフスキ(指揮)、レ・ミュージシャン・デュ・ルーヴル・グルノーヴル(ルーヴル宮音楽隊) 請求記号：6A1.38-41

ハイドンがロンドンで作曲をした 12 曲の交響曲を、ミンコフスキが鮮やかに表現したライブ録音。軽やかな空気に包まれた演奏は、心がすっと晴れやかになるような、幸福な気持ちをわたしたちに授けてくれる。耳慣れたはずのハイドンの音楽が、また新鮮に感じられるから不思議だ。特に、第 103 番の冒頭のティンパニの演奏や、『驚愕』の第 2 楽章では、今まで聴いたものとは一味違った演奏を聴くことができる。ただし、『驚愕』を聴くときは音量に気を付けて…。

来年 2 月に来日予定とのことなので、気に入った方はぜひ生の音楽でも楽しんで。

【映像資料】

『ピナ・バウシュ：踊り続けるいのち』 請求記号：DVD1742-43

昨年公開された映画の DVD 化。ピナ・バウシュといえば長年ヴッパタール舞踊団を率い、独特の感性で新しいダンスの可能性を導き出した振付家の一人である。残念ながら 2009 年に他界してしまっただが、今作には彼女の在りし日の姿や代表作「春の祭典」や「カフェ・ミュラー」、作品に参加したダンサーたちのインタビューなどが収められている。ピナ・バウシュ作品には人間の根源的な感情が詰まっていて、観客はダンサーたちを通じて自分のなかにもそれらを見出すことができる。それこそが彼女の振付の魅力のように思う。特典映像ディスクには、映画未公開の映像やメイキングが収められている。監督はヴィム・ヴェンダース。

【図書】

『ショパン全書簡 1816 年～1831 年—ポーランド時代』ヘルマン他編(関口時正他訳) 岩波書店

請求記号：6.9-C455-12

2009 年にワルシャワで刊行された本の日本語訳。これまでショパンの書簡全集といえば 1955 年刊のシドフ版しかなかったが、この書簡集はそれにとって代わる、意義あるものとなっている。ショパンがポーランドにいた 1816～31 年に書かれた書簡に加えて、書簡に登場する言葉やその背景に関する詳しい注釈、当時の演奏会についての関連記事なども含む内容。ショパンやポーランド音楽文化に関する充実した資料として、一読をお薦めしたい。

2012 年 11 月発行 東京文化会館音楽資料室